



Title	北大総合博物館とは
Author(s)	持田, 誠
Citation	きぼうの虹, 323, 7-7
Issue Date	2009-07-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/39063
Type	column
Note	総合博物館へ行こう. 第1回.
File Information	mochida-2.pdf



[Instructions for use](#)

北海道大学総合博物館は、大学のメインストリートに面した旧理学部本館を使用して、一九九九年に発足、今年で開館十周年を迎える。この間、さまざまな企画展示を開催すると共に、収蔵資料も大幅に増加し、北大の顔として大きな役割を果たしてきた。この連載では、総合博物館の様々な活動や収蔵資料を紹介していきたい。

総合博物館（旧理学部本館）

ロマネスク様式とゴシック様式の折衷を試みた、欧風の堂々たる外観を呈する本館は一九二九年（昭和四年）の建造。一見、煉瓦造りに見えるが、鉄筋コンクリートにスクラッチタイルを貼ったものである。総合博物館は、本館正面から南翼一帯を主体とした三階建てで、まだまだ手狭なスペースながら、膨大な学術資料群の収蔵と、これらを用いた研究・高等教育、それに展示や普及活動が活発に行われている。

正面玄関から中央階段を上ると、アインシュタインドームと呼ばれる吹き抜けのドーム空間がある。最上階のドーム壁面には、果物（朝）、ヒマワリ（昼）、コウモリと一番星（夕方）、フクロウ（夜）を描いた円形の陶板レリーフがはめ込まれており、研究・教育には昼も夜も無いという思いが込められ

ている。

展示室は三つのテーマで構成

展示室は三つの大テーマに沿って構成されている。北大歴史展示と学術テーマ展示、学術資料展示である。

北大歴史展示には、北大の前身である札幌農学校に関する文書や当時の学生のノートなど、建学の

総合博物館へ 行こう

第1回

北大総合博物館とは

総合博物館
研究支援推進員 **持田 誠**



北海道帝国大学理学部時代の本館。外観は現在とほとんど変わらない。（TAISHO絵葉書 持田所蔵）

る膨大な研究テーマからいくつかを紹介しているものである。特に興味深いのは二階の「サステイナブル・キャンパス」で、連続と受け継がれ、発展して来た学術標本や実験器具、それに校舎の設計図面や復元模型などが所狭しと並べられ、知を生み出す母体となった多くの資料を目にしなが、研究の歩みを知ることができる。

精神の礎となるさまざまな資料が展示されている。なかでも、「実学の精神」コーナーには、ウサギの耳へのコールド塗布によって作出された、世界初の人口癌標本（市川厚一・獣医学）を始め、通底する農学校精神がいかに華開いて来たか、その歩みが巧みに紹介されている。

学術テーマ展示は、北大にお

ジュと呼ばれる医学研究用患部複製模型が展示されている。三階には、長尾巧によって一九三三年（昭和八年）に南樺太から発掘された一五〇〇万年ほど前の大型水生哺乳類デスマスチルスの全身骨格（複製）がある他、当時の発掘映像や記録写真なども残されている。また、北海道には多くの火山や鉱山が存在し、北大のフィールドとなっているが、こうした研究で収集された鉱物・原石なども多数展示されている。骨格標本の展示室は、獣医学部の学生たちの手によって作られた力作だ。

収蔵資料は三百万点

総合博物館には三百万点の学術標本があり、そのなかには約一万一千点のタイプ（模式標本）が含まれている。北大は札幌農学校時代の一九一六年（明治二十九年）、松村松年によって我が国最初の昆虫学教室を設置した。以来、蓄積された昆虫標本は二百万点を超え、今日も世界各国から問い合わせが絶えない。一方、一九〇三年（明治三十六年）に宮部金吾により植物学教室が発足して以来、陸上植物標本庫には千島・樺太産植物を含む約三十五万点の腊葉標本群が、藻類標本庫には約十四万点とアジア随一の海藻標本コレクションが構築されている。

植物などの自然史標本と、ムラー

この他にも、標本に基づく分類学を重視した学風が農学校以来の北大における伝統であり、基礎学問の研究教育が脈々と受け継がれてきた。総合博物館では、これらの貴重な学術標本を整理・登録し、データベースや資料目録などによる情報発信を通じて、世界中からの研究利用に供する努力を続けている。

博物館を支える人々

一方で、こうした学術標本の多くが未整理の状態にあることも事実である。標本の整理作業は博物館の専任教員だけでなく、代々の臨時職員や学生達、博物館ボランティアなど多くの人々の努力によって、地道に進められている。また、来館者対応やミュージアムショップ、清掃・警備、広報や管理事務など、博物館活動の日常は、雑多な業務を預かる事務職や派遣・請負業者の人々などの目に見えない努力によって、脈々と受け継がれてきた。

展示は総合博物館の顔であり、研究がその基礎となっている。しかしその根底には、標本・資料の収蔵や整理という土台があり、日常を支える舞台裏の存在がある。総合博物館を支えるために、多くの無名の人々による絶えない労苦が続いている。